

Title	日柳燕石(相原言三郎著, 燕石會發行)
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1940
Jtitle	史学 Vol.18, No.4 (1940. 4) ,p.218(780)- 219(781)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19400400-0219

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

寛容の徳を富ませられ、二十年二月兄宮邦憲王（後の賀陽宮）病身なる故を以て朝彦親王の繼嗣と治定せられ、二十六年十二月士官候補生として入營、始めて軍務に服せられた。其の間、私立成城學校に在學ありしは特筆すべきで、殊に二十六年明治天皇には侍従を同校に差遣し、王の學習の状況を參觀せしめられし程、王の將來に對し尠からず御囑望あらせられしと拜察する。三十年一月歩兵少尉に任官、以來累進を重ね陸軍大將となり、其の間、陸軍大學に學び、歐米を巡視し、又日露戰役に從軍、赫々たる武勳を樹て、陸軍の要職を歴任せられ、昭和四年一月廿七日御病氣危篤に及び元帥府に列せられ武人としての最上位を極められた。

王は謹嚴高潔にして、常に神威を畏み、至誠を以て皇室に奉仕し、精勵恪勤を以て軍務に服せられ、實に軍民の典型であらせられた。又國民精神の作興、國民教化の向上、更に航空事業、殖産興業、美術工藝の發達等に心力を傾盡し、指導獎勵せられしは枚擧に遑なき程で、就中聖德太子奉讚會に意を用ひ、力を致されしは世人の記憶の新たなるものである。王は雅號を謙堂と稱し、漢詩・俳句に豊富なる詞藻を現はし、書道には一家の風を成し、筆蹟には雄勁にして崇高な氣品を拜し、繪畫に於ても特種の風格を仰ぐのである。本書收録の昭和三年四月大和河内地方旅行の御手日記の一節に、

大楠公誕生地を訪ふ、一小阜の上田圃の間にあり、……此所より上下赤坂城趾と敵味方合葬塚等を展望す、余曩に高野山に於て島津義弘が朝鮮役の際の朝鮮人戦死者に對する供養塔を建て居るを見て、今日の赤十字の觀念の夙に我國に發達せるを感じ

たりしが、今此の地に遊びて大楠公が敵味方合葬の事實を聞き、更に古昔より我國に於て對敵觀念の一の美風の存せしことを知り、大楠公の奥床しき心根を敬仰せざるを得ず……とあるは熟讀思考すべき警語である。方今、興亞の大聖戰に際會し、忠靈塔、忠魂碑の計畫建設せらるゝ秋に、如上、我が國古來の美風を重じ、彼の地に建設せらるゝ塔碑は彼我戦歿者を共に慰靈するものとし、他日、平和の昭光將來の曉、彼我民族一團となり、新東亞建設の尊き人柱に對して敬弔の意を表することとしては如何かと思ふ。

終に本書により、炳乎たる王の偉績を、今更欽仰し、合せて久邇宮の御家門の彌々御繁榮を祈り奉つるものである。（昭和十四、九、廿八、武田勝藏謹記）

日 柳 燕 石

（相原言三郎著
燕石會發行）

讚岐國の奇傑日柳燕石の詳傳の皆無なるに、今次、本書の上梓を見るに至りしは慶賀すべきである。本書は上下兩編に分れ、上編に收録するところは、燕石小僧——性行——産んだ家——生立ちとその環境——その父惣兵衛——その母幾世女——その叔父石崎青崗——で、下編は近刊の運びと聞く。茲に本書の新刊を世に紹介するに際し、燕石の略傳を本書によりて左に掲ぐ。

燕石は名を政章、字を士煥、通稱を長松、後、長次郎と云ひ、晩年、耕吉（又は浩吉）と改め、燕石は其の雅號で、別に柳東、芭蕉書屋、撫松樓等十數がある。更に幕末勤王志士との往復には

特に赤松劔吾なる變名を用ひた。文化十四年、讃岐國金刀比羅山麓の榎井村の豪家加島屋に生れ、家は代々質商を營む。燕石、生來、好學俗塵を脱し、殆んど家業を顧みず、義に篤く人の難を見て救はざるなく、青年にして、既に「長次郎親分」の名近郷に高く、博徒の群を顧使して一方の雄となつた。又同志と共に普く天下を周遊して幾多の佳詠名賦を残し、又其の間幾多の俊傑と交遊して國事を談じ、維新回業の志士とは絶えず氣脈を通じ、殊に四方志士の難を四國に避けるや、燕石の庇護を受くる者多く、就中慶應元年四月高杉晉作を潛居せしめ、藩吏の捕縛に向ふと聞かや、機智を以て危難を脱せしめしことなどは人口に膾炙せられる。其年閏五月、藩獄に投ぜられ、囹圄にありても、猶ほ時弊を痛歎し、詩文に托して慷慨の情を述べ、同四年正月出獄するや、高松藩の朝敵汚名の雪辱に奔走し、五月同志木戸孝允等の招によりて上洛、次いで天杯を拜受し、孝允と共に各所を巡周して勤王を説き、更に仁和寺宮嘉彰親王の總督として北越平定に進發に際し、擧げられて軍務官日誌方として隨從し、士卒と共に彈丸雨飛の間を馳驅し、偶々征途の半にして柏崎にて遽かに疾を發し、遂に八月十五日陣歿す。享年五十有二、總督宮深く哀悼せられ、特に諡を大櫻定居彦と賜ひ、厚葬せしめらる。次いで明治二十四年靖國神社に合祀、三十六年從四位を追贈の恩命に浴した。燕石遺稿多く十春詞、皇國千字文等十數種あり、大正十二年香川新報社より日柳燕石全集を上梓さる。

終に最近、燕石の劇化・映畫化が企畫される際に、正しき傳の公刊せられしを喜ぶと共に、筆者相原氏の燕石の皇道精神の發揚

と其の遺業顯現に盡瘁せらるゝに感銘し、改めて敬謝の意を表して擲筆する。(昭和十四年九月十一日武田勝藏)

辜 顯 榮 (同翁傳記編纂會編並發行)

本書は臺灣の偉人故辜顯榮翁の行實である。翁は慶應二年臺中州鹿港の名家に生まれ、早く父を失ひ慈母の手により哺育せられ、夙に家人郷黨より將來を囑望せられ、二十九歳の時、家兄の計に遭ひ、家業を承けた。明治二十八年日清戰役の結果臺灣の我が領有に歸するや、五月急遽と上海より歸臺し、治安恢復の爲め臺北に皇軍を迎ふるに努力し、翁の我が國民としての奉公は茲に始まつたのである。即ち六月始め臺灣巡撫唐景崧の軍が基隆に於て皇師に敗北し、臺北に退却するや、城内は無秩序となり掠奪行はれ、物情騒然として島民殆んど其の歸趨に迷ひし時、當時三十歳の翁は奮然單身にて基隆の我陣營に馳せ、一日も早く皇軍の臺北入城を懇願したるに、幸、水野民政局長に其の眞意を認められ、且つ義民と稱せられ、其の願望は容れられ、我が軍は翁の嚮導にて一兵卒を損することなく、入城するを得たのである。次いで北白川宮能久親王の南進に際して樺山總督の命により鹿港に奉迎し嘉義まで扈從し、又臺北總局長・鹿港保良局長に任せられ、良民の保護、暴民の鎮撫に努力した。獄ほ能久親王の御病軀を押し進軍の際御使用の御轎は翁の獻じたるものと云ふ。後、征臺の役終るや、勳功により島民にして勳六等に敘せられ、賢所參拜さへ許さるゝ破格の光榮に浴した。こは一視同仁の聖恩、新附民人に至大